

幼児の遊びと生活

— これからの取り組みと今後の課題 —

Play and Life of infants

— Efforts and challenges for the future —

宮川 和三* 平田 倫敏**
徳田 泰伸***

(平成29年1月18日受理)

要約

中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」、文部科学省「幼児期運動指針」等を通じて、「子どもを取り巻く環境の変化」「環境の変化に伴う『遊び』の変化」を概観した。その上で、「幼児期の『遊び』」及び「幼児期の『遊び』と運動」の意義を確認し、子どもの本来の「遊び」を確保した社会環境の構築を検討した。

キーワード：幼児、遊び、生活

keywords：Infant, Play, Life

1. はじめに

「幼稚園教育要領」は、「幼児期における教育」を「人間形成の基礎を培うために大切なもの」であると捉え、「幼稚園教育」は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであること」が基本とされるべきことを示している。①「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、②「遊びを通しての指導を中心として」「ねらいが総合的に達成するようにすること」、③「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」なども、「幼稚園教育の基本」として列挙している。

幼稚園教育においては、子どもの生活の基本は「遊び」であること、「遊び」は与えられるものでなく、子ども自身が生み出していくものとして捉えられるべきであろう。

1876（明治9）年、東京女子師範学校に附属幼稚園が開設されてから、時代は大きく変化し、幼稚園における幼児の生活は大きく変化してきた。また、家庭における幼児の生活も大きく変化して

きた。しかしながら、生活様式や子育てにおける価値観が変化しても、子どもの成長発達において「遊び」が大切であり、子どもが「遊び」を通して育つという考え方は、変わることなく受け継がれてきている。

そのことを踏まえ、幼児にとっての「遊び」とは何か、「遊び」が何故幼児の成長発達に大切なのかを考察し、「幼児期の『遊び』」について、研究を深めていきたい。

ところで、2016（平成28）年はオリンピックイヤーと言われ、わが国においても、同年8月は、リオデジャネイロで開催された第31回夏季オリンピックの話題で持ち切りだった。選手と観客が一体となって競技の結果に一喜一憂し、観客が選手を励ます様子も多くみられた。そして、インタビューを受けた選手の応答に共通していたことは、「子どものときからその競技が好きだった」「好きな競技が十分にできる環境に恵まれていた」「○○さんのような選手になりたいという目標を持っていた」というようなことであった。「練習中は

(*みやがわかずみ 保育科教授 体育学)

(**ひらのりとし 兵庫大学健康科学部健康システム学科非常勤講師 体育学)

(***とくだやすのぶ 兵庫大学健康科学部健康システム学科准教授 健康・スポーツ科学)

つらいことも沢山あったけれど、出来なかったことが出来たときの達成感、出来たことを認められた時の嬉しさは何物にも代えられなかった」「今日の成果を踏まえながら、次の目標に向かって明日からも頑張っていきたい」というようなことでもあった。

これらのことは「遊び」を検討する上で何らかの参考になるという考え方も、一つの考え方として留保しておきたいと思う。

2. 子どもを取り巻く環境の変化

中央教育審議会の答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(平成17年1月28日)は、「子どもの育ちの現状」について、「基本的生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題が指摘されている」と述べている。また、「近年の子どもたちは、多くの情報に囲まれた環境にいるため、世の中についての知識は増えているものの、その知識は断片的で受身的なものが多く、学びに対する意欲や関心が低いとの指摘がある」とも述べている。

「子どもの育ちをめぐる環境の変化」としては、「地域社会の教育力の低下」「家庭の教育力の低下」を挙げている。特に「地域社会の教育力の低下」の項では、以下のように記述している。

「子どもが成長し自立する上で、実現や成功などのプラス体験はもとより、葛藤(かっとう)や挫(ざ)折などのマイナス体験も含め、『心の原(げん)風景』となる多様な体験を経験することが不可欠である」「しかしながら、少子化、核家族化が進行し、子どもどうしが集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている」「また、都市化や情報化の進展によって、子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、テレビやインターネット等の室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている」「さらに、人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育

ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない、または、かかわりたくてもかかわり方を知らないという傾向が見られる」

このように論じた後に、同答申は、「幼稚園等施設の教員等には」「幼児の家庭や地域社会における生活の連続性及び発達や学びの連続性を保ちつつ教育を展開する力、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校等との連携を推進する力など総合的な力量が必要とされている」と述べている。

言うまでもなく、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成及び義務教育の基礎を培うものである。「幼児教育の在り方」についての、以上のような指摘を踏まえた上で、「幼児期の『遊び』」の在り方を検討していく必要があると思われる。

3. 環境の変化に伴う「遊び」の変化

なお、「子どもを取り巻く環境の変化」と、これに伴う「遊び」の変化については、いささか古い資料ではあるが、1996(平成8)年「環境白書」の、以下のような記述が、この点についての詳細を説明しているものと思われる。

「遊びは、運動能力の向上はもとより、自然の科学的理解の基礎を与え、また、協調性や創造性、判断力その他の人格形成や社会生活の訓練等、極めて重要な役割を有する行為であると考えられる。特にこれまでの遊びは、年長、年少を含む遊び集団に各人が属し、その集団が自然の中で活動的に動き回っていたこと等が特徴とされるが、その遊びが、近年の環境の変化、とりわけ遊び場としての自然の喪失等に伴って、質的にも、量的にも変化してきたと言われている」

〔1〕遊びの質的な変化

一屋外から室内へ、多様性から画一化一」

「遊びの質的な変化としては、テレビやテレビゲームの普及、視聴時間の増加に伴い戸外における遊び時間が減少し、地域における遊びの多様性の喪失、画一化が進んでいること、また、動植物などの自然の素材を活用した地域的、伝統的な遊

びについて世代間でかなりの違いが見られ、特に動植物との遊びが少なく、単純化している傾向が見られること、さらに、自然の中での体験が減少している」

〔2〕 遊びの量的な変化等

―遊び場と遊び時間の減少―

「地域と時代による遊びの量的な変化として、遊び場の変化を見ると、都市とその近郊において自然との直接的なふれあいを可能にする遊び場の減少が見受けられる」「自然や生物に直接ふれるような戸外での遊び時間は、時代とともに減少してきている。昭和40年頃に屋内での遊び時間の方が長くなり、現在では子ども達が外で遊ぶ時間は、屋内の4分の1となっている」

〔3〕 遊び仲間の変化等

―タテ（年齢）とヨコ（友人の数）の狭まり―

「遊び仲間については、交友関係の縮小、希薄化により、年齢と能力の異なる者の集団から年齢が同じで能力が同様な集団ないし個人での遊びへといった変化が見られる」

〔4〕 遊びの変化と身体

「平成6年度体力・運動能力調査によると、大まかな方向として、男女とも昭和50年頃までの向上傾向は顕著であるが、以後昭和60年頃までは停滞傾向が続き、それ以後は、程度の差はあるもののほとんどの年齢層において、体力、運動能力とも低下傾向を示している」「昭和40年頃に室内での遊び時間が戸外でのそれを上回り、戸外での遊び時間が概ね2時間を幾分下回る昭和50年頃以降、体力の低下が見られるようになり、これ以降は、極めて緩いものではあるが戸外での遊び時間と体力の低下の間に相関関係が見られる」「遊びにおいても都市の利便性、快適性、安全性への慣れが生じ、これが対応や判断力を鈍らせているとの指摘がある」

〔5〕 遊びの変化をもたらしたもの」

「昔と今の遊びを比較すると、遊び場については

屋外から屋内へ、遊び道具は自然素材、自ら作った道具から、人工素材・既製品へと移り変わり、遊び仲間については、異なる年齢と能力の集団から同じ年齢と能力の集団ないし個人での遊びへといった変化が見られた。こうした遊びの変化は、広範な社会経済構造の変化に伴って生じたものと考えられ、その背景には様々な要因が考えられる」

4. 幼児期における運動の意義

2012（平成24）年3月、文部科学省は「幼児期運動指針」を打ち出した。同指針は、幼児期における運動の重要性について、以下のように記述している。

「幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の阻害に止まらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことにもなりかねない。このような状況を踏まえると、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児生活全体の中に確保していくことは大きな課題である」「幼児は心身全体を動かして様々な活動を行うので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。このため、幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」

そして、幼児が適切に運動を行うことにより、次のような効果が期待できると述べている。

〔1〕 体力・運動能力の向上」

「体力は人間の活動の源であり、健康の維持のほか、意欲や気力といった精神面の充実にも大きくかかわっており、人が生きていくために重要なものである。特に幼児期は、神経機能の発達が著しく、タイミングよく動いたり、力の加減をコント

ロールしたりするなどの運動を調整する能力が顕著に向上する時期である。この能力は、新しい動きを身に付けるときに重要な働きをする能力であるとともに、周りの状況の的確な判断や予測に基づいて行動する能力を含んでおり、けがや事故を防止することにもつながる。このため、幼児期に運動を調整する能力を高めておくことは、児童期以降の運動機能の基礎を形成するという重要な意味を持っている。「また、日ごろから体を動かすことは、結果として活動し続ける力（持久力）を高めることにもつながる」

〔2〕 健康的な体の育成〕

「幼児期に適切な運動をすると、丈夫でバランスのとれた体を育みやすくなる。特に運動習慣を身に付けると、身体の諸機能における発達が促されることにより、生涯にわたる健康的で活動的な生活習慣の形成にも役立つ可能性が高く、肥満や痩身を防ぐ効果もあり、幼児期だけでなく、成人後も生活習慣病になる危険性は低くなると考えられる。また、体調不良を防ぎ、身体的にも精神的にも疲労感を残さない効果があると考えられる」

〔3〕 意欲的な心の育成〕

「幼児にとって体を動かす遊びなど、思い切り伸び伸びと動くことは、健やかな心の育ちも促す効果がある。また、遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲や有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるとともに、何事にも意欲的に取り組む態度を養う」

〔4〕 社会適応力の発達〕

「幼児期には、徐々に多くの友達と群れて遊ぶことができるようになっていく。その中でルールを守り、自己を抑制し、コミュニケーションを取り合いながら、協調する社会性を養うことができる」

〔5〕 認知的能力の発達〕

「運動を行うときは状況判断から運動の実行まで、脳の多くの領域を使用する。すばやい方向転換などの敏捷な身のこなしや状況判断・予測など

の思考判断を要する全身運動は、脳の運動制御機能や知的機能の発達促進に有効であると考えられる」「幼児が自分たちの遊びに合わせてルールを変化させたり、新しい遊び方を創りだしたりするなど、遊びを質的に変化させていこうとすることは、豊かな創造力も育むことにもつながる」

「幼児期の『遊び』には、当然、運動を伴う「遊び」が多く含まれている。幼児が体を動かして遊ぶことは、上記の5点にわたる「幼児期運動の効果」を見ても分かるように、子どもの成長発達において重要な役割を占めるものと言える。子どもの本来の「遊び」を確保した社会環境の構築が課題になっていると考える。

5. まとめ

子どもは本来、親の愛護のもとで「手塩にかけて育て」られ、成長発達していく。しかし、核家族化、少子化、女性の社会進出、学歴偏重などの社会状況の中で、生後間もなく保育所等に入所したり、低年齢から塾通いをするなど、親と接する時間が少ない子どもが増加している。また、生活様式が大きく変化し、子どもが家族の一員として家事の手伝いをするのが殆どなくなり、子どもの生活経験が減少している。

このようなことが子どもの「遊び」に影響を与え、例えば、「遊び」の代表のように言われていた「ごっこ遊び」にも、大きな変化が見られるようになっていく。かつては、幼稚園・保育所等において、子どもの遊ぶ姿を見ていると、その子どもの家庭生活が分かると言われるくらい、子どもの遊びと家庭生活との間には密接な関係があった。そして、子どもはこのような状況の中で、「遊び」を発展させながら多くのことを経験し、成長発達していったと思う。

家庭や地域社会の中で、お互いの信頼関係を深め密接にかかわれるような社会環境を構築していくこと、そのことを通じて、子どもは本来の「遊び」を展開し、成長発達していくものであると考える。

〈参考文献〉

1. 文部科学省「幼稚園教育要領」2008年
2. 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」2005年
3. 文部科学省「幼児期運動指針」2012年
4. 環境省「平成9年度環境白書」1997年
5. 徳田泰伸「子どもの健康について —子どもの生活実態から見た健康についての一考察—」兵庫大学論集第20号 pp.143-152、2015年
6. 宮川和三、井上眞美子、徳田泰伸「子どもの発達と幼稚園・保育所における遊具の活用について」兵庫大学短期大学部研究集録第50号 PP. 11-16、2016年